

包括連携協定企業 プレゼンテーション

サッポロビール株式会社 北海道本社
北海道戦略営業部 岩田 邦彦 部長

サッポロビール株式会社は2007年2月に、北海道と「包括連携協定」を締結しています。プレゼンテーションでは、生ビール売り上げの一部を北海道の地域振興のために寄附する「道産子感謝DAY」や、北海道を舞台に挑戦する人を応援する「カンパイ☆ファンディング」などの取組事例を紹介しました。



▶取組事例を紹介する岩田邦彦部長

アンバサダーメッセージ

「GLAY」 「稲葉篤紀氏」
「北海道コンサドレ札幌」
「レバンガ北海道」

ほっかいどう応援団会議の趣旨に賛同し、アンバサダーに就任いただいた、各分野で活躍する著名人の方々からの応援メッセージが紹介されました。

応援メッセージ（動画）は
ポータルサイトから御覧いただけます。



アンバサダーページアドレス

<https://hkd-ouendankaigi.jp/cheering/ambassador>

市町村長プレゼンテーション

むかわ町 竹中 喜之 町長
八雲町 岩村 克昭 町長
士別市 牧野 勇司 市長
上士幌町 竹中 貢 町長
大樹町 酒森 正人 町長

市町村長プレゼンテーションでは、5つの市・町の首長が、地域創生の実現に向けて、重点的に取り組んでいる内容等について紹介しました。

始めに登壇した、むかわ町の竹中町長は、北海道胆振東部地震で被災した際の全国からの支援への感謝と、復興につなげる取組を紹介。国内最大の恐竜全身骨格化石「むかわ竜」をはじめとする地域資源を活かしたビジネスの創出、「むかわ竜」の全身骨格（レプリカ）を作成するためのクラウドファンディングの取組などを紹介しました。



▶プレゼンする竹中喜之町長

交流会

セミナーに続いて開催された交流会では、「ウポポイ開設PRアンバサダー」を務める、俳優の宇梶剛士氏にも御参加いただきました。会場ではアイヌ古式舞踊が披露され、道産食材を使用した料理も数多く出されました。



▲ 道産のシカ肉を使用した料理



▲ 交流会の様子

豊浦町

「小さな町の新たな挑戦」～豊浦型DMOの取組



観光協会の発足

北海道南部、胆振管内の西端に位置する豊浦町は、噴火湾（内浦湾）に面し、基幹産業は農業と漁業。全道的に有名なイチゴや豚肉のほか、噴火湾におけるホタテ養殖発祥の地である豊浦町は全漁獲量の約8割をホタテが占めています。

その豊浦町で、平成30年7月に発足した「一般社団法人 噴火湾とよら観光協会」が取組を進めている「観光地域づくり」についてお話を伺いました。

（取材者 加藤、工藤、守屋）

豊浦の目指す「観光地域づくり」

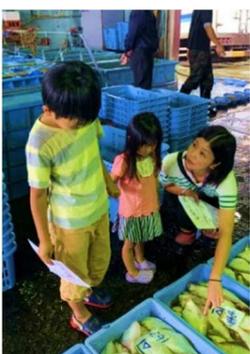
豊浦町における観光振興は、地域の他産業や住民も一体となり、地域の自然や歴史、文化、暮らしといった資源を活用することで、地域全体が活性化することを目指しています。

豊浦町では、平成27年10月に人口減少や少子高齢化などの課題克服に向けた総合戦略を策定しました。その取組の一つとして、観光客の来訪・滞在促進に向け、歴史や文化といった地域観光素材を一体的にマネジメントできる組織の整備を掲げています。

同年12月には専門家が国内外の先進事例を紹介する「観光地域づくりキックオフフォーラム」が開催され、町民等約120名が参加しました。これを皮切りに、町では検討協議会を組織し、観光プログラムの検討等、観光地域づくりに取り組んできました。

そして、平成30年7月、「噴火湾とよら観光協会」が発足しました。同協会は豊浦町内の観光マネジメントやマーケティング等を行い、地域資源を活かした観光商品の開発や観光客誘致の促進と、住民が地域に愛着を持てるよつな地域づくりを目指し、現在は豊浦駅舎2階に事務所を設けて各種事業を展開しています。

従来、観光振興といえば、行政や観光関連事業者を中心に行われ、観光客による消費は一部の産業に限られていました。しかし、地域のあらゆる産業が協力して観光地域づくりを行うことにより、観光による経済効果が地域全体に及びます。また、住民が、自分の住む地域の歴史や文化、自然といった資源を再認識することで、地域に対する愛着と誇りを持つきっかけにもなっています。今回は、そうした豊浦町ならではの「観光地域づくり」を紹介します。



▲体験ツアーで参加者に海産物の説明をする様子

○秘境「小幌駅」の取組

豊浦町の観光資源の1つである小幌駅は、鉄道ファンからは「日本一の秘境駅」と呼ばれ、道内外からも多くの観光客が訪れています。しかし、これまで駅の訪問者はあまり町内に足を運ばずに通過する方が多かつたため、観光協会では「秘境到達証明書」の発行を始めました。駅の看板と本人が写っている写真を町内の温泉施設や道の駅へ持っていくことで、駅を訪れた記念として証明書を受け取ることが出来ます。こうすることで、どのような方が駅を訪れているかを把握できるだけではなく、町内での消費にもつながっています。

また、町で実施していた小幌フォトコンテストを当協会が引き継ぎ、実施しています。平成30年度は道内外から109点の応募があり、さらなる誘客促進に向け、入賞作品によるフォトカレンダーも作成しています。また、表彰者には町の特産品を送ることで、その後のふるさと納税につながった例もあります。

○体験型観光の取組

近年は、旅行者の嗜好も多様化しており、各種体験を目的とした観光ニーズが高まっています。

豊浦町は、噴火湾におけるホタテ養殖発祥の地として、漁業が基幹産業となっているほか、毎年6月には「とようらいち豚肉祭り」が行われ、豚肉やイチゴが全道的に有名となるなど、食資源に恵まれています。

町内では、特産品を活用した世界ホタテ釣り選手権大会やイチゴ狩り体験などが行われており、当協会ではこういった体験メニューを観光客誘致のための地域資源として活用することで、国内外から多くの観光客が訪れています。

また、自主事業として、噴火湾クルーズを企画し、商品化に向け実証しています。豊浦町内の海岸線には世界ジオパークに登録されている「洞爺湖有珠山ジオパーク」の見所であるジオサイトが点在しており、クルーザーで噴火湾を遊覧することで海から見学ができます。

体験メニューは外国人旅行者にも人気が高く、当協会ではこれまで、アメリカやオーストラリア等の旅行会社スタッフや、国内旅行会社のインバウンド部門担当者を紹介し、体験プログラムやモデルコースの紹介・磨き上げを行ってきたおり、訪日外国人のさらなる誘客が期待できます。



▲体験ツアーに参加した外国人観光客

○地域住民を巻き込んだ取組

地域住民が観光客に対するガイド活動を実施できるよう「とようらい観光ガイドサポーター勉強会」を開催しています。

勉強会には20〜50代と幅広い年齢の方が参加しており、地域の魅力を再認識する機会になるとともに、地域全体での観光客誘致に向けた機運醸成にもつながっています。

また、豊浦中学校の3年生を対象に、ふるさと学習の一環として、地域の既存資源を活かした観光プログラムを作成する授業を実施しています。将来を担う世代に対し観光地域づくりの重要性を発信することで、地域への愛着と誇りを持つきっかけづくりとしても重要な取組です。こうした取組は、徐々に地域にも根付いてきており、これまでは観光業に直接関わりの無かった業種の方も、私たちの活動に快く協力してくれるようになってきてくれたのが大変嬉しいことです。



▲豊浦中学校ふるさと学習の様子

日本版DMO登録を目指して

DMO (Destination Management Marketing Organization) は、米国や欧州で普及している、地域の多様な関係者を巻き込みつつ観光地域づくりを行う舵取り役となる組織体のことです。

日本では、「まち・ひと・しごと創生基本方針2015」において、「日本版DMO」を核とした観光地域づくりを推進することとしており、観光庁による登録を受けると、関係省庁を通じた各種支援メニューの提供や総合的なアドバイス等を得ることが出来ます。令和元年8月7日時点で全国136件の法人が登録されています。

「噴火湾とようらい観光協会」においても、日本版DMOへの登録を目指し、今年度中の申請を目指しています。

小さな町の新たな挑戦

当協会は設立からまだ約1年ですが、今後は、日本版DMO登録に向けた取組を進めるとともに、体験観光プログラムの商品化やメニューの開発を行いながら、地域住民のさらなる機運醸成を図り、地域に対する誇りや愛着をこれからも持ち続けられるような「観光地域づくり」を行っていきます。



▶取組について語る岡本事務局長



恵庭市 オープンガーデンで「花のまちづくり」



恵庭市は、札幌市と新千歳空港のほぼ中間に位置し、恵まれた交通アクセスと穏やかな気候風土を持つことから、早くから住宅地整備が進められ、道内外からの移住も多い地域です。
また、市民主導による花のまちづくりが盛んで、「ガーデニングのまち」として全国的にも知られています。今回はその恵庭市が行っている「オープンガーデン」の取組を紹介します。

(取材者 工藤、加藤、守屋)

恵庭の花のまちづくり

恵庭とは恵庭岳をあらわすアイヌ語「エエニイワ」(するごとく)がった高い山から付けられたと言われています。

恵庭市では「恵まれた庭」という地名にちなみ、「美しいまちで暮らし」を目標として、身近な自然環境や地域の歴史・文化を大切に、花や緑を育みながら快適で質の高い生活と美しい地域の風景をつくる花と緑があふれるまち(ガーデンシティ)として「花のまちづくり」を進めています。

また、恵庭市は全国有数の花苗の生産地として知られています。花の種類も生産量も多く、また、品質がよいことから有名で、札幌市の大通公園の花の約8割が恵庭産であるなど多方面で活用されています。

オープンガーデンの取組

オープンガーデンとは、個人やお店などが自ら手入れしている庭を一定の期間、一般の方に公開することです。

イギリス発祥の文化ですが、近年で

は、まちの活性化として日本各地で行われています。恵庭市では毎年6月中旬から8月上旬にかけて、街の至るところでオープンガーデンが実施されています。現在、実施しているところは約50軒。そのうち、実際に庭の中に入ることができるオープンガーデンは14軒で、その他は家の外から見ることができます。恵庭市のオープンガーデンは特に恵み野地区で盛んですが、その歴史はそこに居住している有志で立ち上げた「花いっぱい文化協会」の設立から始まります。



▲6月下旬から8月下旬が見頃となり、その後9月にはほとんどの庭がクローズになります。

一人ひとりが花いっぱい
のまちをめざして

1960年代の恵庭市はまだ農村地帯で、春になると土埃が舞うようなところでした。そのような中、「まちを花でいっぱいにしよう」という有志による呼びかけから、恵庭市は花のまちへ動き始めます。1980年代に入ると、新興住宅街として開発され、移住者も多くなつていく中で「第二の故郷を美しい環境にした」という有志の思いがより強くなりました。1961年にスタートした「花いっぱい文化協会」の活動は、園芸店や専門家のほか賛同する住民・行政の協力もあり、まち全体に広がり現在へ続いています。

また、ニュージーランドにあるクライスト・チャーチでの視察をきっかけとして、1995年夏に「恵み野フラワーガーディング・コンテスト」が行われたこと、全国区での雑誌で取り上げられたこともあり、次第に「花のまち」として全国的に知られていくようになります。

このように見学や視察で恵庭を訪れる人が増えていくなか、2005年から恵庭市民ボランティアによる花ガイドが始まり、オープンガーデンツアーの案内も行っていきます。

例年6月には花をテーマとしたイベント「恵庭花とくらし展・えにわマルシェ」が開催されるなど、恵庭の至るところで花のイベントが開催されています。



恵庭市花いっぱい文化協会
会長 池永 允子 氏

一人よがりな気持ちでは恵庭の「花づくり」はできません。

ご近所さんとのつながりや地域の人々とのコミュニケーションを密にしながら、みんなで協力することでやっていけるのです。

オープンガーデンと言えば「恵み野地域」とよく言われますが、恵み野の限定ではなく恵庭市全体で花のまちと言ってもらえるような活動をこれからも行っていきたいと思っています。



▲ 池永さんの庭。汽車の形をしたオブジェは池永さんのご主人お手製です。

マナーを守って楽しく散策

花を楽しみながらガーデンである住民の方たちとの交流を深めることができただけではなく、歩いて回れば3〜4時間かかることから運動にも最適で、健康にもつながるオープンガーデンの取組は、関係するみなさんの協力とご厚意によって成り立つてきました。個人の庭にお邪魔することになることから、お越しいただく方には、花に手を触れないなど、マナーの遵守をお願いしています。

市では、オープンガーデンの場所を毎年6月上旬頃に発行のパンフレット「恵み野花マップ&恵庭遊マップ」に掲載し、各所で配布しています。そのほかにホームページからもダウンロードが可能です。マップを片手にマナーを守って、お互いが楽しくなるような散策をしていきます。

花のまちを次の世代へ

恵庭市のみなさんが30年以上続けてきた庭を活かしたまちづくりの今後を担うのは、子供たちを含む若い次世代の方々です。これまで、活動を続けてきた方々の後を引き継ぎ、さらにまちを花いっぱいにしていきたいとの思いを込めて、恵庭市では将来を担う世代が育つ環境の整備に力を入れています。

市役所前のグリーンベルトでは、14の花壇があり、近隣の小学生も花壇の植栽

活動に住民の方と一緒に参加しています。このように授業の一環として、さらには、プライベートでも小さい頃から土と触れ合い、遊び、学びながら花と緑に親しむ環境を作っています。

また、郊外にある「めぐみの丘フレスポ恵み野」では、若いお母さんたちが集まり、花を植えるなど新しいコミュニティの形成も始まり、次世代のガーデン育成は日々進んでいます。

そうした活動から公共施設は、花や緑を通じて世代間の交流を図りながら誰もが安心して暮らすことができる、地域の人々のコミュニティ形成の憩いの場となりました。これを次の世代へ引き継ぎ続けていくためにも、恵庭市ではこれからも地域の協力のもと、オープンガーデンを通じた恵庭の「花のまちづくり」の活動に取り組んでいきます。



▲ 恵庭小学校3年生による植栽活動